
最強で最凶な。

いふじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強で最凶な。

【Nコード】

N3188K

【作者名】

いふじ

【あらすじ】

両親の死により、天涯孤独の身となった帝崎聖夜とは何を隠そう俺であります。両親が死亡したと聞いて真っ先に俺が取った行動は預金残高の確認。いろいろ大変だからね。両親の死から数年が経ったある日のこと。我が家の前に生き倒れた人物を発見しました。さて、ここで忠告。妙な親切心は持たずに生きていこう。そうしないと、俺みたいに人間ではなくなっちゃうよ？ 人間じゃないなんて嫌だろ？ そうだね。さて、話を戻すと・・・生き倒れた人物を助けようとしたのが駄目だったのか？ 突然、第三の人物に腹を

刺されて意識を失っちゃいました。てへ！ 次に目を覚ませば、あら不思議。土と草と廃墟と化した街並みが広がってました。ここどこよ？ まさか異世界とか？ ありえない、ありえない。てなことを考えていたのですが、どうやらここは俺が生まれ育った街であるらしい。うん、おかしいぞ。なにより一番おかしいのは、どう頑張っ
て見ても小学生にしか見えない女の子が俺のママーということだね！ 何がどうなってるんですか！？

第1話：始まり（前書き）

連載しているのとは違う作品を書きたくなっちゃって書いてしまいました。

第1話：始まり

さて、ここで一つお伝えせねばならないことがある。

俺、こと帝崎聖夜みかどざきせいやは天涯孤独の身である。

俺、こと帝崎聖夜は人間ではない。

いや、気持ちは今でも人間ですけどね！

事の起こりを話すとすれば、やはり俺の両親のことからだろう。

父、帝崎琢磨みかどざきたくまと、母、帝崎・クリスマス・アリスがある日、突然失踪した。

当時、俺は十二歳。

しかも、両親の失踪日は俺の小学校の卒業式当日だった。

父さん、母さん。

贅沢は言いませんが、もう少し息子に関心を持っては頂けないでしょうか？

両親が失踪して一年が経つ頃、俺の下に二人の死亡通知が届いた。

それまではお隣さんたちや周囲の人が良くしてくれたので、実際に困ることはなかった。

だけど、二人は死んだらしい。

うーん。

さて、これからどうやって生活していこうか？

今までのように、ご近所さんのお世話になってばかりではいられません。

あれ？

両親が死んだということは、その息子である俺は、施設送りの刑になるのかな？

そう思い悩むのは当然のことだと思う。

だって、その頃の俺ってまだ十三歳の子供なんだもん。

「よし」

死亡通知が届いてからの俺の行動は、両親の死を嘆き悲しむことではなく、両親の預金口座をチェックすることだった。

葬式を上げようかとも思ったが、二人の遺体は無い。

それに、俺と同じで父さんは天涯孤独の身だと言っし、母さんは実家を飛び出して駆け落ち同然に父さんと一緒になったと言っていたから、二人の死を知らせる知人もいないわけで。

まあ、実際は父さんと母さんが死んだなんて信じられないという思いがあったからなんだが・・・。

だってあの二人って、息子の俺が言うのもなんだが、色々と反則な存在だったからな。

そんなわけで、俺は両親の預金口座を確認することにしたのだった。

驚きました。

どうして今まで口座を確認しなかったんだろう？

預金額が半端じゃない額だった。

例えるなら、ロールプレイングゲームで所持金がマックス状態。

頭の悪い例えでごめんなさい。

うん、嫌味な感じで例えると次のようになります。

あゝ、ゲームも飽きたな。

うーん、そうだ！

油田を買おう！

旅行に行きたいけど、飛行機のチケット買うのもめんどくさいな。

そうだ！

空港と、その他諸々を買おう！

あれ？

さつき以上に頭が悪いことに？

「大丈夫だ、俺」

気のせいだと自分に言い聞かせました。

一夜にして億万長者というか、十回以上人生を豪遊してもまだ釣りがくる程の剛の強者になってしまった俺。

ここで一つ疑問に思いました。

父さん、母さん。

あなたたちは一体どんなご職業だったのでしょうか？

そういえば、小学校一年生時に先生から、

『お父さんとお母さんの職業を書いてきてね』

と宿題を出されて、宿題のプリントを両親に渡した記憶がある。

両親がどんな仕事をしているのか興味を持った俺が、プリントを見ようとする、母さんからのありがたい一言を貰った。

『人間知らない方がいいこともあるんだよ』

幼心に母さんの笑顔に恐怖を感じて、どんな職業か聞けなかった。

両親の職業に興味を持ちながらも、二人がどんな仕事に就いているのかわからないまま、先生にプリントを渡すことに。

笑顔でプリントを受け取った先生は、プリントに目を通すと、素敵な笑顔のまま固まられた。

次の日、学校に行くと何故か俺にボディガードが就いていた。

両親の話によると、ボディガードは先生の好意なので断るのは失礼だとか。

俺の心の平穏もガードしてもらいたかった。

その後、俺が小学校を卒業するまで約六年もの間、ボディガードとして俺を守ってくれていたシュタイナーという強面のおじさんと

強制的にお付き合いさせられたわけで。

このシュタイナーというおじさんは、とんでもなく優しい人だった。しかし、あまりに凶悪な表情の為、誰も彼に近づこうとしなかった。

必然的に、小学校に通っていた六年間の間で、俺にはただの一人も友達が出来なかった。

俺の青春を返して。

仕事で小学校の卒業式に來れない両親に代わり、シュタイナーさんが卒業式に來てくれた。

そして、卒業式後すぐに、シュタイナーさんは帰国することになった。

帰国前にシュタイナーさんは言った。

『聖夜くん。信頼できる友達を作るんだよ』

その機会を奪った当の本人が何を仰るのやら。

シュタイナーさんに対して怒りはなかったが、少し呆れたことはあった。

そんなことを考えて家に帰ると、家には誰一人として住人がおらず、その後、両親が失踪したのだと周囲の人間に教えられたのだっ

た。

第1話：始まり（後書き）

みなさんからの感想まってまーす！

第2話：契約

両親の死亡通知が届いてから二年後の春。

俺は、地元である六王山市の六王山高校という高校に進学していた。

六王山市は別段特筆すべき名所や、観光スポットがあるわけではない。

それなのに、何十年も昔から、六王山市には人が集まっていた。

何があるわけでもないのにどうしてだろうかと考えてしまうのは、地元住人である俺の当然の疑問であつたわけだが――。

事件は、その六王山高校の入学式が終わつた後に起きた。

我が家の目の前で人が倒れていた。

うつ伏せに倒れた人物は、地面にキスをするように倒れている。

「だ、大丈夫ですか!？」

「・・・・・・・・」

返事はなかった。

まさか、死んじゃってます!?

「・・・を・・・れ」

ぼそぼそとした声で何かを言っているが、声が小さすぎて何を言っているのか聞こえなかった。

「な、何ですか!？」

せめて声が聞こえるように、倒れ伏した人を仰向けにしようと近づいたときだった。

「触れるなああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

倒れていたのは女だった。

女は怒声を上げて言った。

しかし、遅かった。

既に、俺は女性の腕に触れていた。

「逃げろっ!!」

女性は俺を見て言う。

え？

なに？

俺、何かまずいことしちゃいました？

『我は生ける神話。』

私は歩く伝承。

僕は黙示録。

己はパンドラの箱。

ここに契約は完了し、神代が築かれる。

感謝しよう。この出会いに。

讃えよう。この奇跡を。

全ては我が契約者の物に。

今こそ、その名を叫ぼう。

神代の王の名。

その名は帝崎聖夜。

汝、世界の王となれ』

不思議な声だった。

男とも女ともわからない声が、朗々と何かを話している。

本当に何なんでしょうか！？

「・・・悪く思ないでください」

今度の声ははっきりと聞こえてきた。

耳元で囁くようにだったが、聞き間違えるはずがなかった。

声の主は六年間という長い時間を共に過ごしたシュタイナーさんのものだった。

腹が熱く火照り出した。

鈍い痛みも感じる。

これは・・・もしかして？

「・・・あー、コレは死ぬな」

俺の腹には、恐らく日本刀だと思われる刀が刺さっていた。

あー、恐らくというのはね、今激痛でしっかりと確認なんて出来ないからです。

「まだやり残したこといっぱいあるのに・・・」

それが人間としての、俺の最期の言葉になった。

第3話：神殺し

「うそ〜ん」

目が覚めるとそこは、朽ち果てた建物の中だった。

夢であって欲しい。

だけど、現実はそのなにごくはないわけで。

「おめでとうございます」

満面の笑みでそう言う人物に心当たりがありました。

俺を刺した張本人、シュタイナー・バルバロッソ。

シュタイナーさんは、今にも崩れてしまいそうな壁に、その巨躯を預けた状態で、にかつと凶悪な笑みを浮かべながら、続けて言っ
た。

「聖夜くん——いえ、貴方様は、今このとき、この瞬間を持って
世界の王になられた。貴方がどのような王として今後振る舞うのか
を楽しみに——」

「ちょ、ちょっとシュタイナーさん！ 意味わからないこと言っ
てないで、まずは説明してくれませんか！？ どうして俺のこと刺し
たんですか！？ 危うく死んじやう所でしたよ！」

「いえ、あなたはすでに死亡しておられますが？」

答えたのはシュタイナーさんではなかった。

シュタイナーさんの背後から、小さな人影が姿を現した。

あらまあ可愛らしいお嬢ちゃん。

どこのお貴族さまの娘さんかしら？

「えーと・・・どちらさまでしょうか？」

あれ？

でも、この女の子どこかで見たことがあるような、ないような。

「ええ。そうね。まずは自己紹介から始めましょうか」

落ち着いた感じの女の子だなや〜。

やっぱりどこかのお金持ちのお嬢様？

「我の名は、リディア・オクターバ。世界最古の吸血鬼であり、
真祖にして、神殺し^{ゴッド・スレイヤー}。そして、あなたにとってはここが一番重要ね。
我は、あなたの母です」

金髪碧眼の髪の長い小さな女の子はそう言うと、長い髪を優雅にかきあげて俺を見つめる。

フランス人形のように完璧に整った、一つの美の極致を体現したかのような、そんな女の子。

そうか。

可哀想に。

この子も俺と一緒に友達がいらないんだな。

だから、こんなふざけた妄想をして遊ぶしかないのか。

君の気持はよくわかる。

何しろ、俺も友達いない歴〓年齢（十五歳）だから、君より年期は重い猛者だよ。

大丈夫。

友達がいなくなつて、人生なんとかやっていけるもんさ！

「うん、そうなんだ。君みたいな可愛いらしい吸血鬼がいたのか。そうかそうか。うんうん。でも、神様を殺すなんて物騒なことは言っちゃ駄目だよ？　ね、お母さん。あはは——」

「シユタイナーとやら、我はこの子を今にも亡きものにしてやりたいのだが、今の我がこの無礼者を殺せる確率はいかほどか？」

「皆無です。この世界において、このお方を殺せる者は存在しません」

「ふむ。わかつてはいたことだが、やはり腹立たしい」

「まあまあ。聖夜様も、状況が理解できていないだけです」

「ふむ。なるほど。では、しばしの猶予をこの者に与えるとしましょう」

「感謝致します」

うん。

まったく話が見えてこないぞ？

そもそも、ここってどこだよ！

まったく見覚えがないぞ？

そんな疑問が顔に出ていたのかもしれない。

「ここは六王山市ろくおうざんしですよ」

「ここはどこが？」

俺の記憶の中にある、六王山市は都会とまでは言わないが、それなりにビルは建っていたし、何より住宅街があった。

だけど、ここはというと。

シュタイナーさんがいる方とは反対側に顔を向ける。

壁は見事に崩れていたため、外の景色を見ることが出来た。

俺の視界いっぱい広がる景色は、土に、草に、至る所が崩れた
廃墟と豪華？ 三点セットだった。

これで剣と魔法が出てくれば、完璧にファンタジーだね。

「ゴジツ・マードー
神殺し！！！！」

そんな雄叫びと共に、全身を黒い鎧で覆い隠した騎士が現れた。

いつの間に！？

というかどこから現われましたか！？

黒騎士は、右手に刀身が血のように紅く染まった真紅の長剣を装備し、左手には何故か掌の上で激しく燃え上がっている炎の塊を浮かべている。

うん、ファンタジーだね。

「ふむ。面倒くさいことになってしまいましたな」

シュタイナーさんは余裕の笑みを浮かべて言った。

いいえ、面倒くさいとか言ってるレベルじゃなくて、俺今、割と

本気で命の危機を感じているのですが？

「シユタイナーとやら。どうでしょうか？ □で説明するよりも、実際に体験していただいた方が、理解も早く済むのではないでしようか？」

「そうですね」

なんだか激しく嫌な予感がしますのは気のせいでしょうか？

恐らく気のせいではないと思います。

そうだよね。

「決まりですね。では、ええと・・・」

「彼の名前は帝崎聖夜です」

「では改めまして、帝崎聖夜。我が息子として、新たな神殺しゴッド・キラーとして、まずは目の前の相手を倒してみなさい」

倒せと申されましても・・・。

ほら見てごらんなさい。

あちらの黒騎士さんがお嬢さんの一言で、殺る気を漲らせているじゃありませんか！？

「ゴッド・キラー
神殺し！！！！」

だから、それ何！？

第4話：神殺しの闘い

『オーデイン』

『ヴォーダン』

そんな言葉が俺の脳裏に浮かび上がる。

「おお・・・」

ヴォーダン。

ウォーダン、ヴォータンとも呼ばれる神を、黒騎士はかつて崇拝していた。

「おお・・・我が神よ！！」

ヴォーダンという神は、ゲルマンの主神であり、ドイツ地域などではこの名で呼ばれ、風や死を司り、暴風雨の夜に声をたてて疾走する霊たちや、稲妻や雷の霊を支配する神であるとされる。

「何故・・・何故・・・」

古い時代は戦いの神、嵐の神であったが、時代が下ると主神となっていたのである。

「私は貴方を心から信頼していたというのに、貴方は私の信頼を裏

切られた！！ 神殺し（ゴッド・マードー）などという下賤な輩に殺され、貴方は私の信頼を裏切ったのです！

よろしい。ならば私は、貴方を殺した神殺し（ゴッド・マードー）を、この手で屠りその栄華を我がものと致しましょうー！！」

特に北ヨーロッパではオーデインとして広く信仰されたが、キリスト教が広まるにつれて、主神から死神などに神格が変化していった神である。

「な、何だよコレ！　なんか変なんだけど！！　頭の中でわけのわからない情報がぐるぐるすると流れ込んできて――」

「安心なさい。我が息子、聖夜。それは神殺し（ゴッド・マードー）である貴方の能力のほんの一部」

「は、はい！？」

「どんなに素晴らしい力であっても、その力の扱い方、知識を知っておかねば、それはただの宝の持ち腐れ」

「いや、あの・・・」

「神殺し！（ゴッド・マードー）」

ああもう、黒騎士さん。

貴方さっきからうるさいですよ！

オーデインには、八本足の戦馬スレイプニルという愛馬がいる。

「八本足！？ それもう馬じゃないよ!!」

「我が息子、聖夜。今は黙って情報に耳を傾けていなさい」

フギン（思考）、ムニン（記憶）という二羽のワタリガラスを世界中に飛ばし、二羽が持ち帰るさまざまな情報を得ているとされている。

全知全能の神。

詩の神。

戦神。

魔術と狡知の神。

死と靈感の神。

万物の神。
アルフォズル

戦死者の父。
ヴァルフアズル

偉大で崇高な神。
フイムラチユール

叫ぶ者。
フロフト

語る者。
フロフト

高き者。
ハーヴィ

禍を引きおこす者。ヘルヴェルク

知恵者。

フロプタチュール。

軍勢の父。

恐ろしき者。ユツグ

勝利を決める者。ガクンラーズ

仮面をかぶる者。グリームニル

人間の神。ヴェラチュール

兜をかぶれるもの（グリーム）。

旅路に疲れたもの（ガングレリ）。

兜をつけたもの（ヒアームベリ）。

第三のもの（スリジ）。

わかかえるもの・海。スンド

波。ウス

戦士の目をくらますもの（ヘルプリンディ）。

片眼のもの（ハール）。

真実のもの（サズ）。

姿を変えるもの（スヴィパル）。

真実をおしはかるもの（サンゲタル）。

軍勢の名で快く感じるもの（ヘルテイト）。

突くもの（フニクスル）。

片眼を欠くもの（ビレイグ）。

焰の眼をせるもの（バーレイグ）。

（蜜酒を）隠すもの、守るもの（フィヨルニル）。

誘惑に長じたもの（グラフスヴィズ）。

途方もなく賢いもの（フィヨルスヴィズ）。

眼深に帽子をかぶったもの（シーズヘト）。

長髯の者。
シーズスケッグ

戦の父。
シグフェズル

馬にのって突進するもの（アトリーズ）。

船荷の神。ファルマチュール

顔をかえることのできるもの（イヤールク）。

船人。キャラル

促進者。スロール

滅ぼす者。ヴィズル

望むもの（オースキ）。

最高のもの（オーミ）。

同じように高きもの（ヤウンハール）。

盾をふりまわすもの（ビヴリンディ）。

魔法の心得あるもの（ゲンドリル）。

槍をもつもの（スヴィズル）。

目覚めたるもの（ヴァク）。

高座につくもの（スキルヴィング）。

さすらうもの（ヴァーヴズ）。

生贄に決められたもの（ガウト）。

灰色の鬚。ハールバルズ

戦の狼。ヒルドールヴ

ヴィズリル。

勝利の父。

シーズグラニ。

万物の父。アルファズル

ブリンド
盲目。

フリニカル。

分捕品をつくる者。フェング

攻撃者。

疾駆する者。

試す者。

片眼の英雄。ハール

知を欲す者。

これらは全てオーディンの呼称である。

「我がかつて殺した神の名は、ヴォーダン^二オーディン。さあ、我が息子、聖夜。貴方はどの力を我に魅せてくれるのかしら？」

「この手で神を殺し、私が新たな神となろう!!」

言つて、黒騎士は左の掌の上で激しく燃え上がっていた炎の塊を、血のように紅い長剣に叩きつけた。

次の瞬間、黒騎士の持つ長剣は爆ぜ、その手から姿を消した。

[illegible]

その奇声とも咆哮ともつかない発声の後、黒騎士の頭上に十階建てビル並みの、超巨大な剣が出現した。

「え、うそですよね？」

その剣は、大きさは比べ物にならないほど巨大だが、刀身は先ほど黒騎士が装備していた剣と同じく、血のように紅かった。

「わた、わたたたた、わたしイイイイががががあああ
！！！！！ 神にイイなあああああああるウウウ
ウウウウ！！！！！！！！」

その狂った声と共に、黒騎士は頭上に出現した超特大剣を俺に目
がけて振り下ろす。

待て。

待て、待て、待て！！

そんな大きなもの反則でしょ！？

死ぬの！？

俺こんなわけのわからない状態のまま死んじゃうのか！！

『ガゲンラーズ（勝利を決める者）！！』

へ？

あれ？

今、俺何か言った？

パリン。

その音を合図にしたかのように、ガラスの割れるような破壊音が周囲に響き渡る。

「おおおおおっ！！ 主よ！ 我が神よ！！！！

私は・・・

・・・」

そんな言葉を残し、黒騎士は消滅した。

文字通り、消え失せたのである。

「ど、どうなってんのコレ？」

暗闇の中、一つの小さな灯が、この世界を覆う闇に対し、小さな抵抗を示すかのように輝いていた。

「ミネルバ様」

老人のしわがれた声が、主の名を呼んだ。

「神を呪いし黒騎士の一人、『ラルヴァー ブラッド・ソード』が消滅致しました」

「っ！」

そこは、かつて日本と呼ばれていた国の首都・東京。

その、跡地であり、現在は闇に飲み込まれた国である。

この国には、まだ名前は無い。

「では、ついに現れたのですか!？」

「はい。我らの英雄が誕生されました」

人の身に神の力を宿す者。

人に対し最強。

神に対し最凶。

あらゆる生命を超越せし存在。

その者、神殺し（ゴッド・マードー）。

「これで、この世界は救われるのですね」

第5話：今後の指針

「ではまずは現状を把握していただきましょう」

シユタイナーさんは何事もなかったかのように言う。

ちょっと待って下さいな。

俺、少し前は訳のわからない理由で黒騎士さんに殺されかけていたのですが、その所どうなのよ？

「今の貴方様はこの世界の王であり、神の一柱であらせられます」

はい、もう既に訳がわかりません。

「貴方様のお名前は、帝崎聖夜でもあり、ヴォーダン・オーディンでもあるのです」

はっはー！

超ご機嫌な説明がきたぜー！

もうホント訳がわからないんだぜ！

「リディア様の神殺し（ゴッド・マードー）の能力は、殺した神の力を自身の力として行使出来るというものです。ですが、正直な話、今の貴方様に敵う神はこの世のどこを探してみてもいないでしょう。言うなれば、貴方様は存在そのものが反則なのです。同様に、貴方様を殺せる神はおりません。ということは貴方様を殺せる人間

も存在しないということ。ここまででは理解できましたかな？」

「ああ」

「さすがですな。では次ですが・・・」

正直まったくこれっぽっちも理解できません。

だから適当に返事をしました。

だって何をどう説明されてもわかりそうもないからね！

「ここは、紛れもない日本です。まあ、多少貴方様が存じている日本とは変わってはいますが」

うん。

多少どころか、もういつそ別世界だよね！

「このようなことになってしまったのは、封印されし古き神々がこの世に蘇ってしまったからです」

「神様って本当にいたんだー」

「ええ」

「でも、どうして封印つてのが解けたんでしょうか？」

そこで、シュタイナーさんは押し黙る。

「世界の英雄が死んでしまったからよ」

シュタイナーさんの代わりに答えたのは、小さな女の子であり、自称吸血鬼兼俺のマミーと言い張るリディアちゃん。

「我が息子、聖夜にもわかりやすく簡単に説明すると、この世界に存在していた古き神々を封印したのが我が息子、聖夜の両親。つまり、琢磨とアリスの二人。その二人が死んでしまったのが一番の原因ね」

本当に、父さんと母さんは死んだのか・・・。

うん？

ちょっと待てよ？

「リディアさんは俺の両親とはどういったご関係で？」

「戦友」

わお。

ただの友達ではなく、戦の友と書いて戦友ときたか。

つーか、本当に父さんと母さんはどんな仕事をしていたのでしょ
う？

「ちなみに、シュタイナーとやらも二人の戦友だったようです。
ついさつき知りましたが」

ぺこりと頭を上げてみせるシュタイナーさん。

そんなシュタイナーさんはリディアちゃんに話の続きを促せる。

「この世界は我が息子、聖夜が生きていた世界の遙か未来です」

タイムトラベラー聖夜と呼んでくれ！。

わはははー。

そんなフラグを立てた覚えは一切ないけどね！

「貴方はあの時、偶然と奇跡と、英雄の血によって、私から神殺し（ゴッド・マードー）の能力を受け継いだのよ」

あの時と言うと、生き倒れていた人を助けた時だろうか？

しかし、私からというが、あの時の人と、リディアちゃんとは、背丈が全然違わないかい？

顔は・・・似てはいるが。

どっちにしても謹んでお返しいたいです。

「でも、まあこれで良かったのかもしれないわね」

まったくよくありません。

主に俺が。

「時期は早まったけれど、将来、神殺し（ゴッド・マードー）の能力は我が息子、聖夜に引き継がせる予定だったし」

そんな予定は俺の将来設計に入っていなかったのですが？

「というか、どうして俺が息子なのでしょう？」

「私の能力を引き継いだから」

うむ。

息子の定義を間違っ て認識しているのは俺なのだろうか？

「神殺し（ゴッド・マードー）の能力引き継ぎには条件があり、その条件とは一度死ぬこと。人間の肉体のままでは、その身に神の力を受け継げないから。だから、シュタイナーは我が息子、聖夜を刺し殺した」

「その節はどうも」

とはシュタイナーさん。

その返しはちょっと違うんでない？

めちやくちや痛かったし、寒かったし、熱かったし、総合的に言えば、怖かったのだからね！

「まあそんなことがあって、我が息子、聖夜は見事、神殺し（ゴッド・マードー）となっ

たわけだけど、ここで一つ問題が出てきたのよ」

「問題？」

「ええ、予想よりも早く古き神々が目覚めてしまったの。本来、琢磨とアリスが死んでも、百年ぐらいは問題ないと思っていたのだけれど、どうしてか古き神々は目覚めてしまった。その目覚めの影響を受け、時空は歪み、あらゆる次元、事象が繋がり一つになってしまったの。我が息子、聖夜が意識を失ってから実際には一日ほどしか時間の経過はないわけだけど、世界は古き神々の影響を受けて、千年の時が経ってしまった」

世界よ。

もう少し根性で頑張ろうぜ！

「と、いうわけで、我が息子聖夜にはこの世から古き神々を一掃してもらいます」

無理ですよー！

「ああ、すみません訂正します。一掃するのは、この世界に生きる全ての生命に害を与える神のみです。古き神々の中にも、温和な神は存在しますから、そういった神をも一掃する必要はありません」

どっちにしても無理ですよー！

っーか面倒くさい。

ゲームしたい。

マンガ読みたい。

友達と遊びたい。

友達いないけど・・・。

彼女とイチャイチャラブラブしたい。

彼女もいないけど・・・。

「そして――」

まだ説明が続くのか。

「害を成す古き神々を一掃しつつ、我が息子、聖夜には国を立ち上げて貰います」

「はい？」

「国を作るには、人の力が必要です。なので、我が息子、聖夜は仲間を集めて国を作るのです」

「どうして国なんて作るのか聞いてもいいですか？」

「神に対抗するためです」

訳がわかんないよー！

助けてマミー！

「ん？ 呼びましたか？」

と、リディアさんが訪ねてくる。

「今何か、我が息子からの救難信号的なものを受信したのですが・
」

「ナンデモナイヨ？」

「そうですね。では早速出発するとうしましう」

「どこへ？」

そんな俺の問いかけに、シュタイナーさんが答えた。

「旧東京、現名の無い国です」

「我が息子、聖夜。いつでも戦える準備をしておきなさい」

そう言つと、二人は俺に背を向けてさっさと歩き始めるのだった。

もう丸二日は歩き続けている。

一睡もしていない。

だけでも、眠くもなければ疲れも一切感じない。

俺って、実はすごい体力の持ち主だったのか？

「今の貴方様は神なのです。人間であつた頃の常識は今の貴方様には一切通用しませんよ」

心と呼んだのかと思う程、的確な答えを示してくれたシュタイナ
ーさん。

「リディアは平気？」

「ええ。我も人間ではありませんからこの程度では疲れなど。それよりも、我の名を呼び捨てにするとはいいい度胸だと言いたいのです
が？」

笑顔を保つたまま、言葉に刺を持たせて言うリディア。

「でもさ、リディアちゃんって言うて怒るでしょ？」

「我を侮辱しているとは思えません」

「母さんとも呼ぶなと？」

「まだそんな歳ではありません」

自分は息子呼ばわりするくせに・・・。

つか、軽く千年は生きてるんだから、歳なんてもう気にする必要はないように思うが、声に出して言えば厳しい罵倒が俺を待っているので黙っていることを固く誓う俺。

「それじゃあなんて呼べと？」

「・・・リディアでけっこうです。なんだか考えるのが面倒くさいので」

本人の許可が下りたので、これからもリディアと呼ぶとしよう。

「しかし流石に飽きがくる景色ですね」

「そうですね」

そう答えたシュタイナーさんは突然俺に話を振ってきた。

「聖夜様」

「なんですか？」

「これまで歩んできた景色を見て、何かに気付きませんか？」

一週間前までプレイしていたRPGの攻略途中のダンジョンみたいな景色ですね！

と、考えるが口にしない。

瓦礫の山に、人の気配がまったくしない廃墟、無造作に生えまくった草に、あちこち窪んだ跡の地面。

驚くような光景はまだまだ見たが、一体何に気付けた？

「うーん・・・わかりませんね」

「そうですか。では」

言って、シュタイナーさんは顔の前で指を一本立てた。

その立てた指をそのまま空に向かって指差す。

「空？」

「ええ。何か変だとは思いませんか？」

暗いなー。

真っ暗だなー。

そんな感想しか浮かんでこない。

あれ？

ちょっと待てよ？

二日間、空にある筈のものを見た記憶がないぞ？

「えーと・・・太陽？」

「そうです。太陽です」

「それがどうかしたの？」

「・・・ふむ。まあ、直にわかります」

なら聞かないで。

「それはそうと、聖夜様」

「なんですか？」

「そろそろ戦闘準備をお願い致します」

「は？」

そう言うと、シュタイナーさんは急に立ち止った。

「頑張るのですよ、我が息子、聖夜」

リディアはポンポンと俺の腰を軽く叩く。

何を頑張れと？

「神殺し（ゴッド・マダー）……………！！！」

またですか！？

「殺す！！殺す！！殺す！！」

叫び声を上げながら、黒騎士が突進してくる。

前の黒騎士とは違い、今度の黒騎士は武器を持っていなかった。

その代わりに黒騎士は背後に軍勢を従えていた。

「我がアアアアアアアアアアアアアアアア主イイイイイのおおめめめ命イイイイ！！！！！！　こここここ殺すううううう！！　殺せえええええええええ！！」

それが合図だったのだろう。

背後に従えていた軍勢が一斉に突撃してくる。

向かってくるのは土で作られたような、出来の悪い人形のようなものだった。

「ラルヴァ・ドール」

「ら・・・何？」

「あの軍勢はラルヴァ・ドールと言いまして、文字通り、黒騎士が造り出した意思を持たぬ人形です。それどころか痛みも感じず、ただ黒騎士の命令を忠実にこなすだけの存在です。なに、貴方様にとって、あの程度の軍勢など、どうということはありません」

噓つけ!!

無理!!

つか、今さらつと俺にとってって言ったよな!?

ってことは、あの数を俺一人で何とかしろと、仰りやがりますか!?

どう考えても死ぬ!!

それにシュタイナーさん今二回も自分で軍勢だと仰りましたよね!!

軍勢ってのはね、数がかなり揃っていないと使わない言葉なんだよ?

ということは、一人でどうにかするなんて出来るわけないよね?

「では、よろしくお願い致します」

「ちょ、待って!!」

「神殺し（ゴッド・マードー）！！！！！！」

もう考えている時間なんてないよ！！

どうするんだ俺！！

「さて、我が息子、聖夜がどう切り抜けるのかとても楽しみです」
リディアは本当に楽しそうに笑顔で言う。

『思考せよ』

「は？」

『軍勢に勝利するには何をすべきか？』

なんだ・・・コレ？

『思考せよ。軍勢に勝利するには、同じく軍勢を叩きつければ良い』

いや、あー。

『思考せよ。汝は既に最強の軍勢を得ている』

何言ってるんだ？

『思考せよ。己は常に汝と共にあり。己の名はフギン（思考）』

え？

それだけ？

今の本当に何だったんだ？

俺が既に軍勢を持っている？

おかしなことを仰る。

自分を含めて三人では軍勢とは言わないのだよ。

「神殺し（ゴッド・マダー）………!!」

あー!!

もうすぐそこまで——。

純白な馬。

その体躯は巨躯。

跨るは一騎当千の戦士。

一騎で敵は無く、軍勢で最強。

知らない言葉だった。

ただ、知らなかったが、今はもう知識として俺の中にある。

思い出したわけではなく、今知った。

だけど、使えるとわかる。

だから、俺はその言葉を口に出した。

『シグフェズル（戦の父）！！』

思い描いた姿だった。

思い描いた姿は白い騎士。

そして――

その数は、軍勢！

黒騎士の軍勢を遙かに上回る数の白騎士たちは、高らかな闘とぎの声を上げて突撃していく。

相手は何の抵抗も出来ずに消えていく。

その光景は戦などではなく、一方的な暴力だった。

残された黒騎士は、白の波に飲み込まれて消えて去った。

「これほどは……。さすがは我が息子、聖夜」

白騎士たちが勝闘かちだてを上げている中で、リディアの声は何故か鮮明に聞こえてきた。

第7話：旧東京―現名も無き国への旅路（出会い）

旧東京―現名も無き国。

ここでは国の人間全てが等しく同じことをしなければいけない。

それは、神への生贄である。

一年毎に、神への生贄を捧げなければ、名も無き国は滅ばされてしまう。

生贄に選ばれるのは決まって女性であった。

そして、その年の生贄として選ばれた女性は、名も無き国の女王となるのである。

夫は妻を差し出す。

兄は妹、姉を差し出す。

恋人を差し出さねばならぬ悔恨。

この生贄の儀はすでに数え切れぬほど繰り返されてきた。

名も無き国の民は疲弊しきっていた。

国に名前が与えられる前に、この国は滅びるかもしれないと皆が口には出さずとも、心の奥底では感じていた。

誰に生贄としての白羽の矢が立つのかは、その年になるまでわからない。

新しい年になる日に、神の御使いと自ら名乗るラルヴァが女性の名を呼ぶ。

ラルヴァが名も無き国を訪れるのは一回である。

一度目は、生贄の女性の名を告げに現れる。

名を告げられた女性は声に出さず、心で叫ぶ。

女性の身内は、絶望に身を投じる。

そして、二度目の訪問では――。

「ミ、ミネルバアあああああローズフェルトうううううううう!!」

「はい」

凜とした声が答えた。

「ふふふふふふ二日後オオオオオオオオオオ！　神
はお前をををををつつ！！　しょしょしょ所望さ

言つと、ラルヴァは頭上高く両手を掲げる。

掲げた両掌は徐々に赤みを増していき、熱気が辺りを満たしていき。

「わわわわわわ我が神の名はアアアアアア！！」

「我が神の名を告げましょう！」

再び、ミネルバは凜とした声で言う。

ミネルバの声にラルヴァはピタリ、と動きを止めた。

そして、邪悪と称するに値する笑みをミネルバに向けた。

「我が神の名は——」

「ああビビった。マジでビビった！」

ラルヴァ？ とかいう未だに訳の分らん黒騎士さんが、たくさんのお友達を連れてきたときは本気で終わりだと思いましたよ。

でもまあ何とかなるもんだね！

あんな大群を何とか出来る俺って凄いと自画自賛しちゃうよ、俺！

「聖夜様」

しかし、本当にここってば未来なのん？

未来がこんなのだと知ってたら、勉強なんかしなかったんだぜ！！
もつといっぱい遊んでおけばよかったと思ってるんだぜ！！

「聖夜様！」

「は、はい！」

シュタイナーさんの怒声のような呼びかけに驚いてしまう俺。

仕方がないよね？

シュタイナーさんみたいな凶悪なお顔の持ち主になら驚くなという方が無理があると、俺は思っわけです。

「聖夜様！　いつでも闘える準備をお願い致します！」

またか！？

「我が息子、聖夜。気を抜いてはなりません。何かがあります」

そう言って、リディアは少し離れた位置にある草むらに視線を注

いでいる。

んー？

リディアの視線に合わせて、俺も目を向ける。

あ、あれ？

確かにガサガサと草むらが揺れている。

でも、そんなに慌てることでもないでしょうに。

恐らくあれは野ウサギさんではないかと思われそうですよ？

ほうら御覧なさい。

直に愛くるしい野ウサギさんが、そのお顔を見せに現れるから。

「・・・・・・・・」

そう思っている間に、草むらからひょっこり顔を現した野ウサギさん。

「やあ」

あれ？

おかしいな。

野ウサギさんが言葉を話しているよ？

ああ、でも驚くほどのことじゃないよね？

ここは未来とはいえ、異世界感たっぷりなんだもんね。

かの有名な不思議の国の案内人も確かウサギだったんだから、野ウサギさんが人間の言葉を話したとしても・・・。

「こんにちは」

野ウサギさんが近づいてきて、俺に握手を求める。

「聖夜様に近づくな！」

「どうして？ そんなに怖い顔をしないでよ」

野ウサギさん——ではなく、俺の目の前にいるのは紛れもなく人間ですね、はい。

彼？

彼女？

男とも女とも区別がつかない目の前の人物は、人懐こい笑みを浮かべて俺に言った。

「ボクと友達になってくれないかい？」

俺は、その一言に衝撃を受けた。

「い、今・・・何て？」

怪訝な表情で彼（彼女？）は俺を見る。

「アレ？　ボク、何かおかしいこと言っただけかな？　まあいいや。
あのさ、ボクと友達になってくれないかい？」

我知らず、俺の視界が揺らいだ。

瞳は熱くなっていく。

頬に何かが伝う。

「ど、どうしたの！？　我が息子、聖夜！」

「聖夜様！？　お、おのれ貴様あー！」

リディアとシュタイナーさんは何故か動揺&激昂している。

二人ともどうしたんだろうね？

「あ、あのー」

彼（彼女）は、俺を見て若干引き気味な態度で言う。

「どうして君は泣いているの？」

俺、泣いてるのか？

「あ、ああ・・・ごめん。その、嬉しくて」

「嬉しい？」

「うん」

涙を乱暴に拭って俺は言う。

だって、俺に初めて友達が出来た！

嬉しすぎるんだぜ！！

「こ、こちらこそよろしく！！ 君のことは生涯大切にするよ！
！（友達として）ありがとう！！ 本当にありがとう！！」

彼（彼女）の手を取り、心からの言葉を贈る。

「あ、え？ う、うん・・・」

彼（彼女）は何故か頬を染めて頷いた。

「ボクが女の子だって一目で分かったんだ・・・」

彼（彼女）は何か言っていたが、その声は小さすぎて上手く聞くとが出来なかった。

第7話・旧東京―現名も無き国への旅路（出会い）（後書き）

ご意見・ご感想などおまちしております!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3188k/>

最強で最凶な。

2010年10月9日22時14分発行